

第43回日本看護科学学会学術集会（下関）

日本で働くインドネシア人の
「自立」の考え方の変化
-回復期リハビリテーション看護の学びとして-

小笠原広実（公益財団法人 日本アジア医療看護育成会）

野崎真奈美（順天堂大学 医療看護学部）

背景・研究動機

- ▶外国人スタッフは、日本の回復期病棟において、
入院患者が生活の中で機能を取り戻していく姿に驚いていた
- ▶勤務を通して出来ないことを手伝うのではなく、患者の力を向上させたいと意識が変化していた
- ▶「自立」について、ADL向上という狭義でとらえる傾向がみられた
(小笠原, 2022)
- ▶日本の看護を経験し何を学んでいるのか、さらに明らかにしたい

研究目的

回復期リハビリテーション看護の経験を通して起こった、インドネシア人の「自立」の考え方の変化をとらえ、今後の指導の方向性を明らかにする

研究方法

研究対象： 日本の回復期リハビリテーション病院で看護師・介護士として働くインドネシア人

- ①リハビリ期の脳梗塞患者の不自由な状況を設定し、どのようにとらえるかを問う選択式質問調査を行った。母国語併記とした
- ②来日前と現在のとらえ方を比較検討し、意識の変化の特徴を抽出した
- ③今後、日本の看護の何を伝えていけばよいのかを考察した

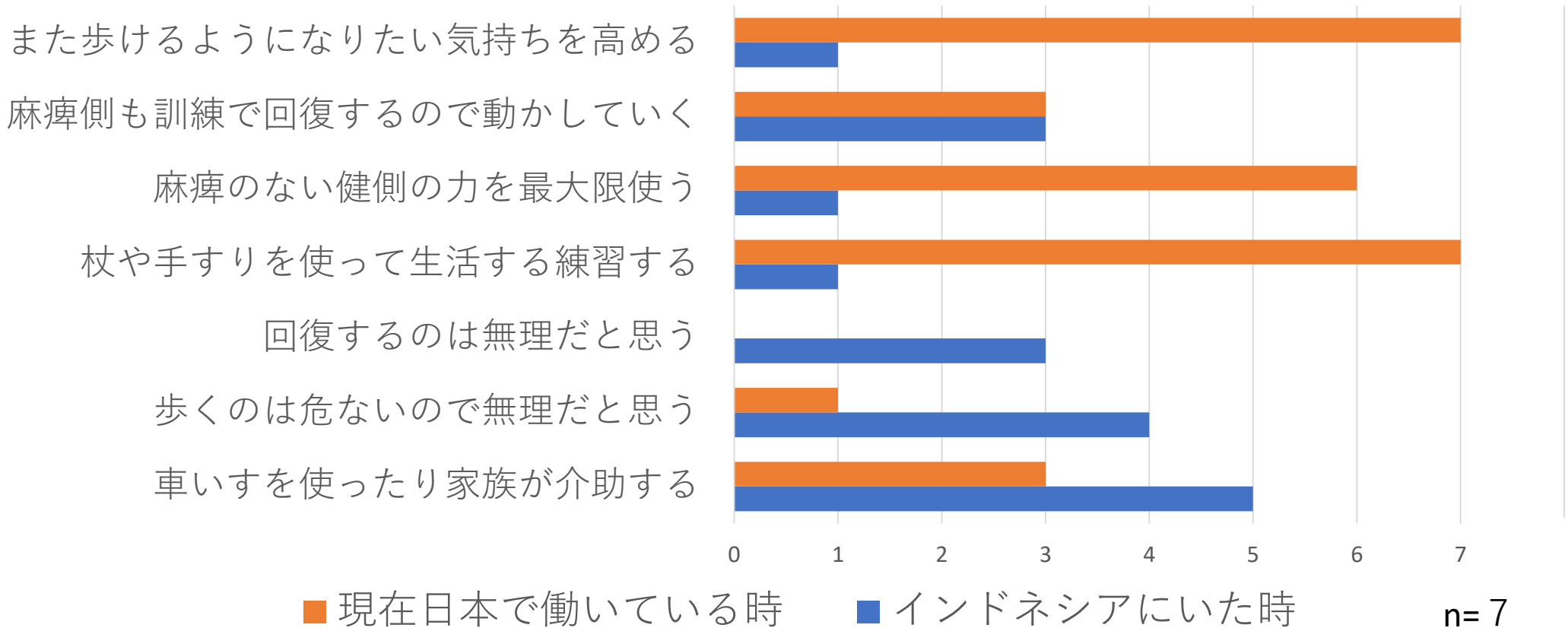
【倫理的配慮】

研究目的、及び協力は任意であることを口頭と文書（母国語）で説明し、口頭で同意を得た上で回答の提出をもって同意とみなした。研究倫理を検討する院内委員会の承認を得た

結果

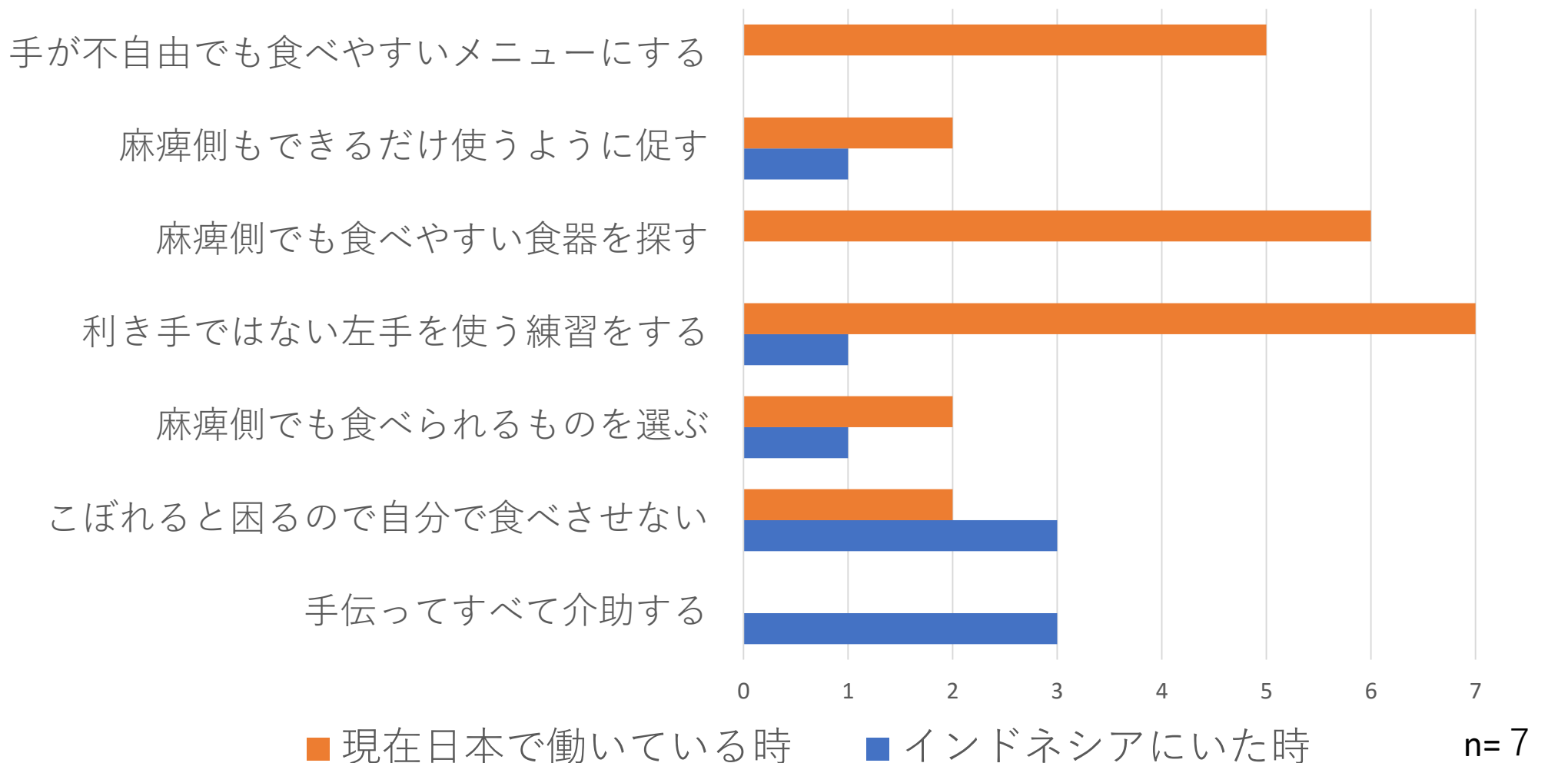
7名から回答を得た。日本での経験年数は、8か月から4年であった。

1. 片麻痺で歩くのが難しい時にどうかわるか



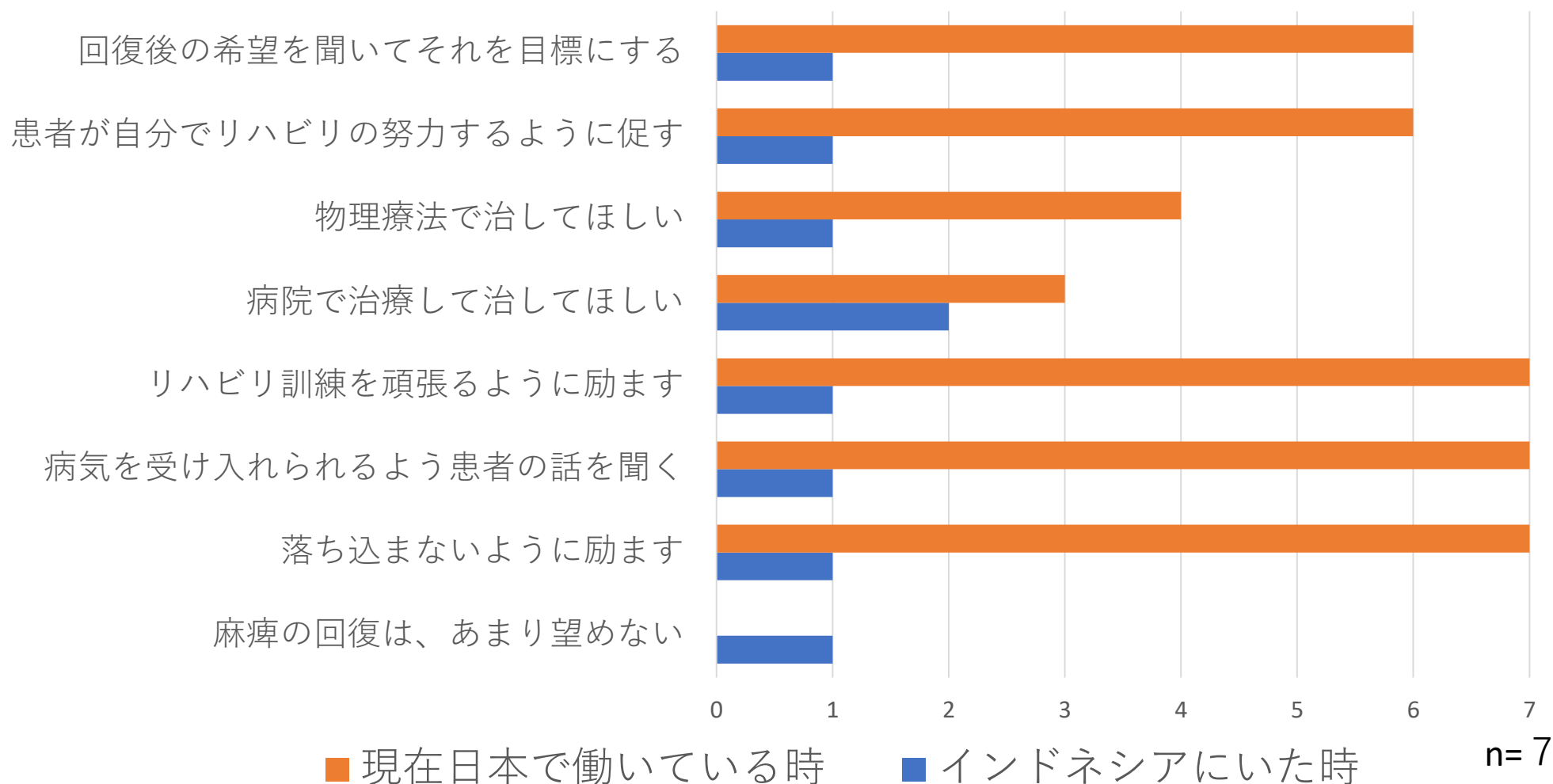
「回復するのは無理だ」は43%から0%に減少した。「杖や手すりを使って生活できるよう練習する」は14%から100%に上昇した。「また歩けるようになりたいという気持ちを高めていく」は14%から100%に増加した。

2. 右手で食べる動作が難しい時にどう関わるか



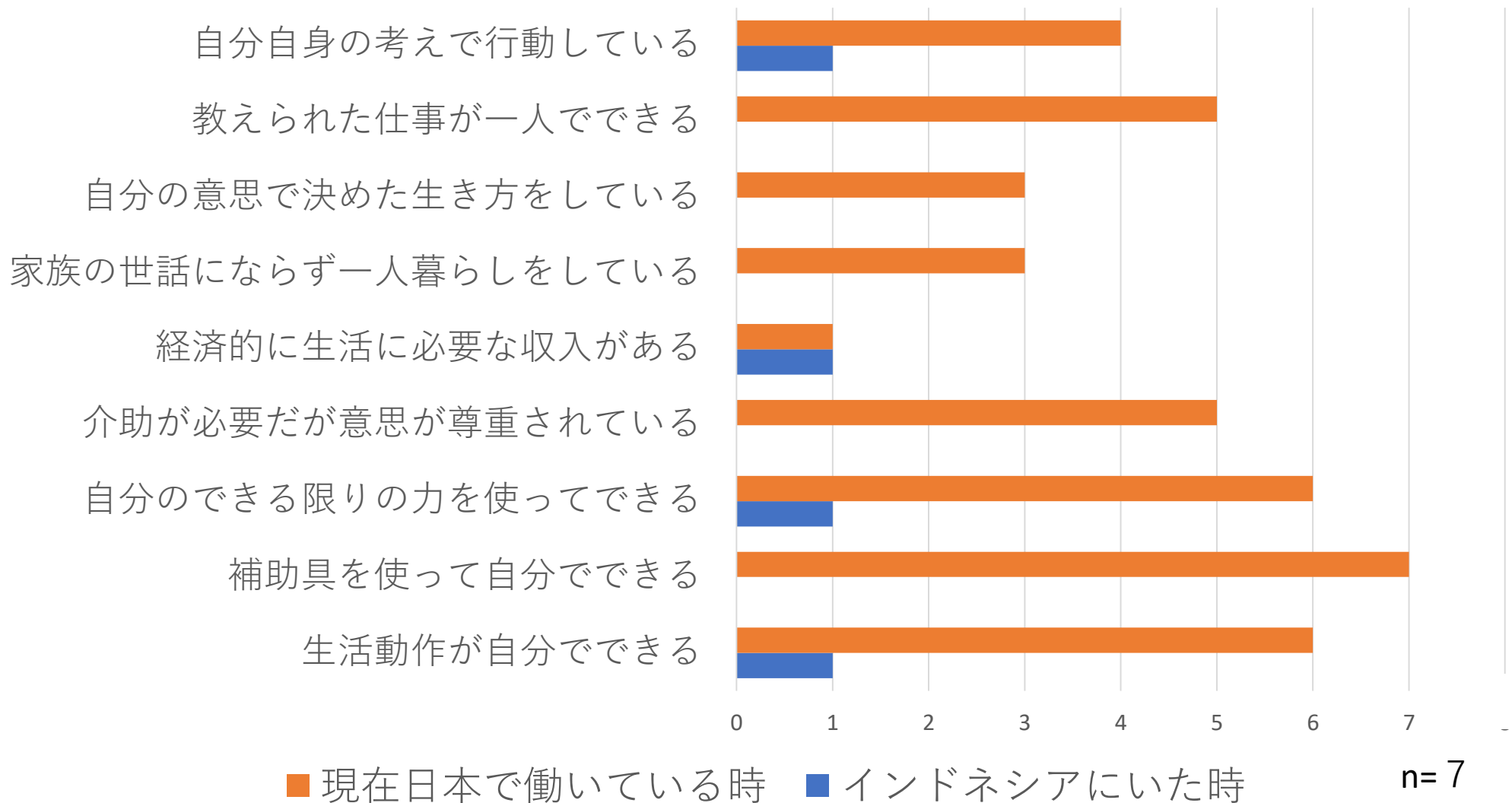
「すべて介助して食べさせる」が43%から0%に減少した。
「利き手ではない左手を使う練習をする」が14%から100%に増加した。

3. 麻痺や症状の回復のために、どう関わるか



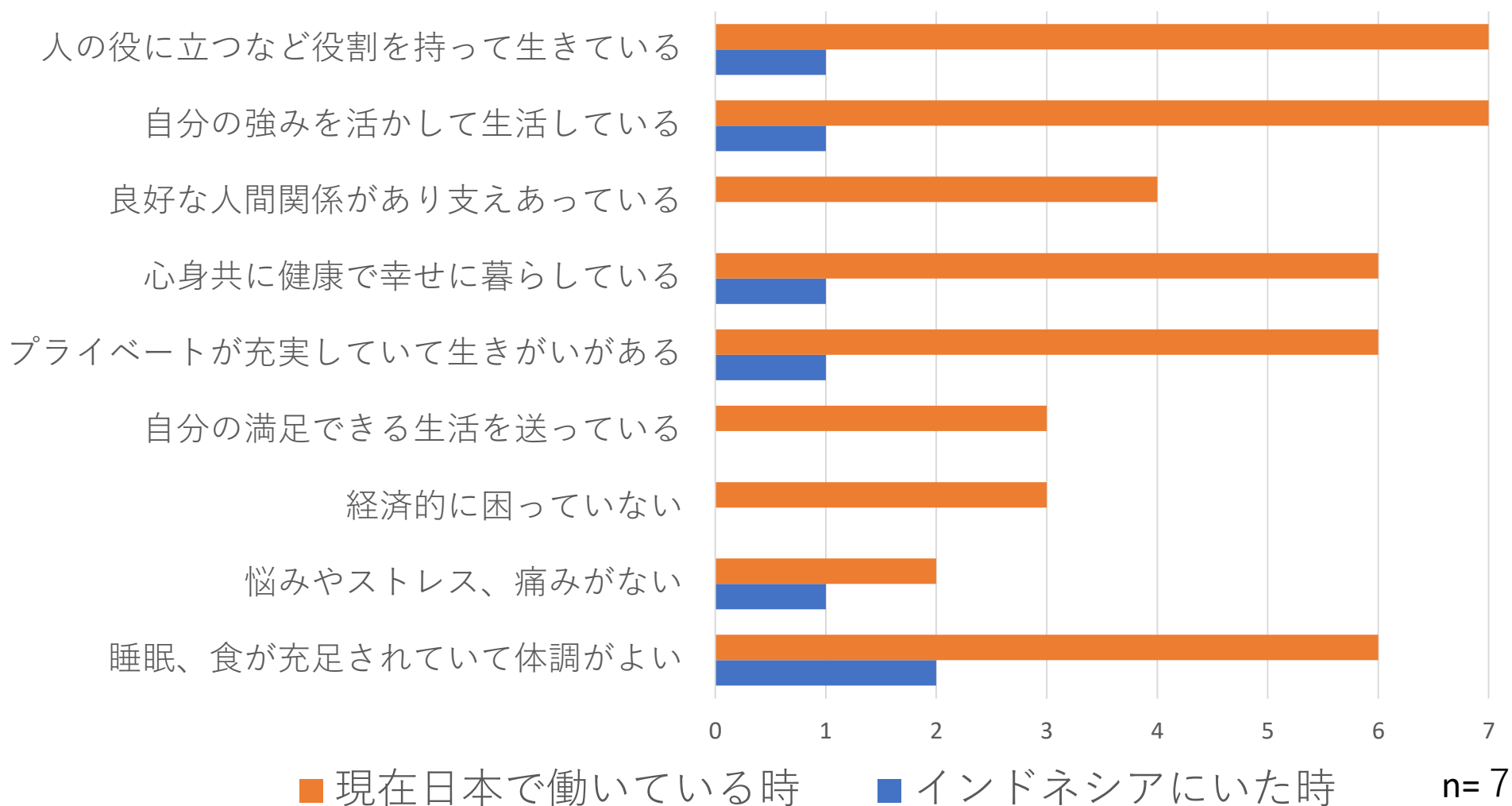
「病気を受け入れられるように患者の話を聞く」「リハビリの訓練を頑張るように励ます」が、14%から100%に増加した。

4. 「自立する」とはどういう状態だと思うか



「補助具を使って生活動作が自分でできる」が0%から100%に増加した

5. QOLの向上とはどういう状態だと思うか



「人の役に立つなど役割を持って生きている」「自分の強みを活かして生活している」が14%から100%に増加した。

考察

来日前のとらえ方の特徴

- 麻痺がある患者が回復して歩くのは無理だととらえていた
- 食事動作が不自由なら、全介助するべきだと考えていた
- 「回復を促す」とは、ADLの機能向上を考えており、精神面についてはあまり考えていなかった

現在のとらえ方の特徴

- 補助具を使って生活の練習をする、残存機能を最大に使う、患者の思いを前向きにする関わりにより、機能回復を期待するようになった
- 残存機能を活かし、自力での摂取ができるようなメニューや食器を探すようになった
- 疾病の受容や回復意欲の向上などの精神面に働きかけが大切であると思うようになった

病棟で患者さんが回復していく姿を見る
看護師が日常生活の工夫をしているのを見る

- * 自立することについて、昨年の調査では、ADLの向上という狭義でとらえる傾向がみられた
- * 今回の調査では、「介助が必要だが意思が尊重されている」「自分のできる限りの力を使ってできる」「自分の意思で決めた生き方をしている」というとらえ方の変化を自覚していることがわかった
- * QOLの向上についての考え方は、「人の役に立つなど役割をもって生きている」「自分の強みを活かして生活している」を全員が選択するように変化していた

まとめ

- 日本の看護を実際に見ることにより、麻痺があったとしても、機能回復をあきらめず、残存機能を最大限に活かした自立した姿を目指すようになっていた
- 患者の思いへの働きかけにも視野が広がっていることが確認できた
- 今後は、引き続き精神面、社会面も含めた自立を支える視点に注目させる指導が必要であると考え

日本看護科学学会 COI 開示

筆頭者氏名 小笠原広実

所属名 公益財団法人 日本アジア医療看護育成会

演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業・組織および団体等はありません。